

教育センター・ニュース

Education Center, Tottori University

NEWSLETTER No. 14

第14号 2015年10月23日発行

目次

- ・教育センター全体の活動（新入生学習相談会／ふれあい朝食会「学習相談」）・・・1
- ・高等教育研究開発部門の活動（高等教育改革関係／GP関係／FD関係／高等教育研究会関係）・・・1
- ・共通教育開発部門の活動（教養教育の改革WG）・・・2
- ・外国語部門の活動（実用フランス語技能検定試験／職員の研修（英語・プレゼンテーションコース）指導／中四国大学教育研究会／夏期マラヤ大学英語研修／夏期大山短期集中英語研修）・・・3
- ・健康スポーツ部門の活動（トレーニングルーム使用説明会／附属学校園教育支援／中四国大学教育研究会／キャンプ実習）・・・3
- ・教育センター関係教員名簿・・・4

教育センター全体の活動

●新入生学習相談会

教育センターでは新入生対象の「学習相談会」を4月3日（金）に開設しました。当日は教養科目等の抽選マークシートの提出締切日でしたが、9時から17時までの間に鳥取地区新入生の20.5%にあたる220人から相談がありました。相談者の学部別割合では医学部が最も高く新入生の26.2%にあたる43人から相談があり、地域学部（38人、18.6%）、農学部（32人、13.5%）、工学部（107人、12.3%）と続いています。また、相談内容では教養科目についてが最多（全相談内容の40.7%）であり、履修表の記入方法が2番目（31.1%）でした。今年は昨年と比べて相談者数が約100人減少しましたが、相談会の事前に行われた「全学共通科目説明会」（4月1日、2日）が効果的だったのだろうと推測されます。



●ふれあい朝食会「学習相談」

4月8日から14日にかけてふれあい朝食会が実施されました。教育センターでは毎日2名から3名の教員が交替で朝食会に参加しました。昨年まで設けていた学習相談用ブースをやめ、本年から学生と食事を共にしながら会話するというスタイルに変更した結果、相談者数は昨年の10名から49名に大幅に増加しました。相談内容は全相談件数27件のうちの89%が学習相談に関係のない内容であったため、新入生とふれあうことに意味があった朝食会であったと思われます。

（担当：福元和行）

高等教育研究開発部門の活動

●高等教育改革関係

昨年より全学ワーキンググループで審議してきた新たな教育グランドデザイン「現代的教養と人間力を根底におく教育」は、研究、社会貢献グランドデザインとともに4月、正式に決定しました。

同じく昨年より全学ワーキンググループで検討してきた「科目ナンバリング」についても平成27年度より正式に導入されました。これは、現在学士課程段階にとどまっていますが、今後、大学院課程においても導入を検討

することになります。

●GP 関係

本学においては、平成 26 年度「地（知）の拠点整備事業(COC)」に採択され、地域における大学として地域志向教育に取り組んでいます。その一環として、COC 推進室教育部門において、新規科目の開設を行っており、本年度から「鳥取の歴史に学ぶ」等 3 科目を立ち上げました。また、平成 27 年度「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」において、本学の申請課題「学生と社会の相互交流による人材育成・地元定着促進プログラム」の採択が決定しました。COC 事業に引き続き、今後も地域志向人材の教育を推進することになります。

●FD 関係

平成 27 年度に採用された教員を対象に初任者 FD を 6 月に実施しました。米子キャンパスからの参加者も含め約 30 人が参加し、前半では、本学の教育方針や大学教育の基本的な事項の確認を行い、後半では 2 グループに別れ、それぞれ教育担当理事、教育センター長と積極的に意見交換を行いました。一般教員については、9 月に教員 FD また 12 月に講演会を開催する予定です。

●高等教育研究会関係

全国大学教育研究センター等協議会が 8 月 26 日、27 日に筑波大学東京キャンパスで開催されました。全体テーマは「学生を中心とした大学への発展に向けて」で、初日は公開研究会 I 「国際的なチューニングの試み」として「国際的なチューニングのあり方：深堀聰子・国立教育政策研究所総括研究官」「筑波大学でのチューニングの試み：野村港二・筑波大学教育イニシアティブ機構教授」の講演が行われました。

ここでは、欧州各国の大学及び大学院のカリキュラム構造や履修単位の換算及び教授方法の調整 (tuning) 等、各機関において単位や学位の認定にかかる判断に資するための方法や動向について報告がなされました。つぎに、これに関する筑波大学の事例紹介が行われました。

つづいて、「学生参画型 FD のあり方：橋本

勝・富山大学教育・学生支援機構教授」「山口大学の事例：林透・山口大学大学教育機構大学教育センター准教授」の講演が行われました。報告者が富山大学で実践している学生参画型 FD についての事例紹介が行われ、また報告者の前任大学での実践の契機や従来型の学生主体 FD との相違について報告されました。続いて山口大学の事例紹介が行われました。

二日目は、協議会分科会「テーマ（2）FD の再検討」に 10 大学が参加し、各大学の取り組みの報告が行われ、それぞれの課題について協議を行いました。

(部門長：永松利文)

共通教育開発部門の活動

●教養教育の改革 WG

全学共通科目教養科目の科目区分が平成 27 年度から改訂され、これまでの「基幹・主題・特定」に替わり「基幹・主題・キャリア」となり、さらに授業内容にまで踏み込んだ教養教育改革WGがこの 3 月に立ち上がり、本学学生が卒業後に地域や世界で活躍するために必要な豊かな教養を身につけさせることを目指し、全学共通科目の中でもとりわけ文系科目を充実させようとする動きが始まったことは前回のニュースでお知らせした通りです。

「学生に身に付けさせたい教養としてどのようなものが必要か」という問いかけに対する各学部からの還流意見に基づき、本部門における検討案を教養教育改革 WG に提案し、人文科学分野においては「哲学・倫理学」、「心理学」、「芸術学」、「文学」の 4 領域、社会科学分野においては「法学」、「政治学」、「経済学」、「歴史学」の 4 領域の計 8 領域にそれぞれコア（核）となる科目を設け、これら科目を選択必修で学生諸君に学ばせる方向に進めることが確認され、9 月に開かれた共通教育推進委員会において報告されました。これらの 8 領域は、本学の大学憲章および教育理念等を考慮に入れた結果、学部に関係なく必要な教養として選ばれました。当初はコア科目という枠を新たに設けることを考えて

いましたが、WGでの検討の結果、既存の基幹科目の枠内に開設することとしています。

これら8領域に開設される科目は、本学学生の教養形成にぜひ必要だと考えられる内容が、可能な限り広い範囲にわたり盛り込まれ、かつ、コンパクトに精選されているものであることが要求されており、開講年度・担当教員によらない同一の内容で、学生に対し統一的・共通的な教育を保証するものであることを原則としています。また、学生の履修機会を確保するため、同一科目を複数クラス開設することとしています。本稿執筆時点では、学部等にはこれら科目の修得単位数を、また、関係する各教科集団にはこれら科目の開設および具体的な科目名、授業内容、開設可能なクラス数まで含めて検討していただいている段階です。これに基づく教養教育が実施されるのは、農学部と地域学部の改組構想に合わせて平成29年度以降に想定されています。

(部門長：橋本隆司)

外国語部門の活動

●実用フランス語技能検定試験の実施

6月21日、実用フランス語技能検定試験が外国語部門の松本教授を責任者として鳥取大学広報センターにて実施されました。

●職員の研修（英語・プレゼンテーションコース）指導

平成27年度職員のグローバル人材育成研修に参加している職員に対して英語プレゼンテーションの指導を7月1日、22日、8月5日、9月16日、30日に実施しました。研修生は、仕事で忙しい中、大変積極的にプレゼンテーションを行い、英語の発音や説得的にプレゼンテーションを行うための内容やスキルに関する助言を受けました。

●第63回中国・四国地区大学教育研究会参加

平成27年6月13日・14日に徳島大学で行われた第63回中国・四国地区大学教育研究会に外国語部門からは滝波助教が参加しました。二日目の語学教育分科会では、徳島大学の現在の英語カリキュラム及び学生の自立的学習の基盤形成と四年間にわたる英語学習サポートを目標とする英語カリキュラム改善案についての発表があり、それらについて活発な質疑応答が行われました。

●夏期マラヤ大学英語研修

平成27年度夏季マラヤ大学英語研修プログラムは、8月31日～9月24日の日程でクアラルンプールのマラヤ大学にて行われました。本研修の特徴として、参加学生一人に対してマラヤ大学の学生がバディとして一人対応し、同じ部屋に宿泊しながら授業にも一緒に参加し学習をするという点が挙げられます。外国語部門からも小林准教授が研修の事前研修等に参加、プログラムの実施に携わりました。

●夏期大山短期集中英語研修

夏期大山短期集中英語研修（9月11日～9月16日）が中国・四国地区国立大学大山共同研修所において実施されました。14名の学生が、外国人TA3名、大学教職員とともに、授業、食事、大山寺散策、牧場でのアイスクリーム作り等、生活のあらゆる場面で原則的に英語オンリーのイマージョン・プログラムに参加しました。教室はもとより、フロアの掲示物やゴミ箱の英語表示にいたるまで「英語漬け」の環境での学習です。大山寺へのフィールドトリップでは、精進料理、座禅等の日本文化を再認識する機会もありました。学生たちはBBQなど昼食を食べた大山山麓の牧場から一望できる弓ヶ浜半島や水平線の向こうの隠岐の島の景色に魅了されながら、さらなる学習の決意を新たにしていたようでした。

これらの経験は、学生たちが将来において海外語学研修、ホームステイ等に参加する際は勿論のこと、英語を使う職業について際にも役立つことは当然ですが、単位とは無関係のこの語学研修に学生たちが自発的に参加し、言葉の運用能力を高めたいというその目的を、努力とさらなる学習意欲の向上によって着々と達成しつつある点が最も重要なことであると実感しました。

(部門長：福安勝則)

健康スポーツ部門の活動

●トレーニングルームの使用法説明会の開催

平成27年度の第1回、第2回のトレーニングルーム使用法説明会を5月19日と5月21日に

実施しました。

●附属学校園における教育支援活動

(1) キッズスポーツ・アンド・スタディサポート (夏季プログラム)

5月20日から7月1日までの計7回、毎週水曜日に活動を実施しました。活動には附属小に通う2・3年生の児童24名が参加しました。今回も秋季プログラムに引き続き「仲間を助けること」に注目した鬼ごっこ(なかま鬼)を実施しました。児童の援助行動に対する効力感(人を助けることができることに対する自信)について、普通の鬼ごっことなかま鬼の前後を測定したところ、普通の鬼ごっこでは差が認められなかったのに対して、なかま鬼の前後では差が認められました。これまでの結果も合わせると、なかま鬼には援助行動に対する自己効力感を高める効果がありそうです。上野先生(10月1日付で他大学に転出)は本活動では、附属学校に対する教育支援活動を自らの研究とうまく組み合わせることができた、と述べています。



(2) 陸上教室

5月20日～9月9日までの計12回、毎週水曜日に実施しました。活動には附属小に通う4、5、6年生の児童28人が参加しました。本年は走運動は毎回実施し、隔週で走り幅跳びも実施するというプランで臨みましたが、天候にも恵まれ、また例年ほど気温が高くならなかった

ため、十分練習活動ができ、多くの児童に50メートル走及び走り幅跳びで記録の向上が認められました。また、昨年来、助け合って活動することも教室の目標に掲げましたが、「ミニハードルの設置、片付け」「記録の測定」「記録の記入」「砂場の整地」などの活動を児童間で話し合い、自発的・積極的に行う児童が多く見られました。



●第63回中国・四国地区大学教育研究会

6月14日に開かれた基盤教育分科会では「大学生としての基本的スキルや社会人基礎力としての教育」というテーマが設定され、情報化社会への適応、健康の自己管理、コミュニケーション力などの多岐にわたる基盤教育についての今後の実施のあり方について議論が行われました。なお、「保健体育分科会」を復活させることに全く問題はない、という回答を得ました。

●キャンプ実習

9月27日から9月29日までの日程で大山でキャンプ実習を実施します。参加者は24名(男子13名、女子11名)です。テント設営、クッキング、大山登山などの課題に取り組みます。
(部門長：福元和行)

教育センター関係教員(○は部門長、*は兼務教員)※ 外国語部門、健康スポーツ部門の兼務教員は割愛しています。

教育センター長：藤村 薫

高等教育研究開発部門：○永松利文、吉野 公*、武田元有*

共通教育開発部門：○橋本隆司、田畑博敏、後藤和雄、井上順子、桐山 聡、武田元有

外国語部門：○福安勝則、T. サージェント、松本雅弘、和田綾子、小林昌博、S. リーン、滝波稚子

健康スポーツ部門：○福元和行



編集・発行 鳥取大学教育センター広報誌編集委員会 電話：0857-31-5795(内線2429)

E-mail：st-soumu@adm.tottori-u.ac.jp